

## 綿と河内木綿

「綿」と「綿」、読みはどちらも同じ「わた」ですが、植物としてのわたを「棉」、製品としてのわたを「綿」と書きます。

夏から秋にかけて棉は、淡黄色の花を咲かせ、その後、桃に似た実がなります。やがてその実がはじけて中から白いふわふわした繊維が吹き出します。

江戸時代の一七〇四年、川替え以来、古大和川の河床はいつせいに開墾され、その多くは商品作物として有益な木棉が植えられました。棉花が最も盛んであったころの

収穫期には、河内平野一帯は雪が降り積もったようだと、いわれるほどの景観だったようです。

土質と水利事情からも木綿は適していました。



大東市域では、押廻し（現在の栄和町）や横山新田（現在の三住町や浜町）などに多く作られたようです。

享保七年（一七二二年）の新田村明細帳によれば、農閑期の仕事に女性には「木綿かせぎ」をするという記述があり、摘み取った綿を糸にし、機で織って布にするなどの作業は、女性が力を発揮する場となっていたようです。

しかし、明治になり外国綿が輸入されると、棉花栽培は姿を消してしまいました。

## 河内の蓮根掘り

お正月の御節の一品を飾る蓮根は、かつて新田地区でも盛んに栽培されていました。

しかし、低湿地の特徴を生かした蓮根田は、住宅や工場へと姿を変えました。今は、当地の「蓮華橋」などの名から、泥田や池に美しく咲く蓮の華を思い浮かべるしかありません。

享保七年（一七二二年）の新田村明細帳によれば、農閑期に男性は「蓮根掘り」をするとあります。

秋から冬にかけて、冷たい泥田に浸かっている蓮根掘りは、厳しい労働でした。

地区の南北に通じる数本の水路と水路にはさまれた幅60間（約109m）の泥田から蓮根を運び出すため、2間（約3・6m）の板を30枚並べ、その上を渡りました。



森田実蔵さん（新田本町）所蔵

た。たくさん蓮根の重みで泥に足をとられ、歩きにくかったからです。水路に面した小屋で蓮根の泥を洗いました。小屋は稲を干す「はせ」（丸太を組み、背後を蓮の茎の束をくりつけた壁で囲い風を防ぐ工夫をしました。壁にした茎の束は用が済むと、乾いているのでふるのまきとしてリサイクルしたようです。

蓮根で寿ぎ、2000年の節目年が見通しの明るい年であることを願いたいものです。